

---

# 蒼き龍の運命

山城 ありす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼き龍の運命

### 【Nコード】

N0550Q

### 【作者名】

山城 ありす

### 【あらすじ】

襲撃によって両親と住処を失った主人公・アオイ。村でたったひとり彼女生き残ったのは謎の剣士・龍のおかげ。彼に言われて村から逃げるも居候させてもらうことになった家はどこか訳あり……。国政を巻き込んだ大規模な恋愛ファンタジー(?)です。

## プロローグ

ほんのり赤みを帯びた月が妖しげに光を放ち始めたころ。

真夜中とは思えない騒々しさにアオイは目を覚ました。

まだ歪みの残る視界の中、アオイの瞳が一番に捉えたのは慄然たる顔つきで自分を抱きしめる母の姿。じんわりと伝わってくる温かなやさしい体温と微かな震え……。

普段とは明らかに様子が異なる母の姿を目にし、急に不安に駆られて目を閉じるも耳に入ってくるのは惨い音ばかり。

刀の交わる鈍い音、

村のみんなの悲鳴、

幼い赤子の鳴き声……

「お、か……さん？」

今にも消えてしまいそうな細い声で、小さな身体を力なく震わせる。

アオイもようやく悟ったのだ。

自分の置かれている危険な状況を。

自分たちの村が襲撃を受けているという事実を……。

アオイが母の腕の中で茫然としている間にも着々と残酷な音は勢いを失っていく。それに比例して村から世紀が消えていったのは明確なことだった。

「これで全部か？」

「いや、まだ一軒残ってるぜ」

「行くか」

「おう！」

そんな声が聞こえた直後だった。父が刀を構えている正面の扉が大きな音を立てて強引に蹴り飛ばされる。

全身に返り血を浴びた二人の剣士は口元をにやりと吊り上げると、

まるで獣のような眼で刀を振るった。

一瞬、月明かりを浴びた二つの刀がざらりと光り、見慣れた父の衣が瞬く間に赤く染められていく。

「ア、オイ……」

ぐったりと地べたに倒れこんだ父はかすれた声で娘の名を口にす。これが父の最期だった。

それと同時に腕の中でうづくまるたった一人の我が子を護るように固くまわした手を、母は自ら解いた。

母の匂いがふわりと鼻を突く。なんの武器も持たずに剣士に飛び掛った彼女もまた、刀の餌食へと化した。

母の温もりを掻き消すように吹く、冷や冷やとした風がアオイから体温を奪っていく。

両親を殺めた刀がアオイに向けられる。あまりの恐怖ゆえに身動きが取れない。アオイは死を覚悟した。きつく唇をかみ締め、俯く

……が、一向に刀は振り下ろされない。

うつすらと目を開き、恐る恐る様子を伺う。

その目に映ったのは憎き二人の獣。しかし彼らの目にはもはや生氣なと欠片もなく、自らの血で更に赤く染まっていくのだった。

天窓から儚げに月明かりが射す。暗闇の中、ぼんやりと浮かび上がる人影。シルエット彼は血の滴る剣を静かに鞘に納めた。

「お前、名は何という?」

落ち着いた、少し低めの声でそう訊ねた彼はアオイの目の前に腰を下ろす。

「あ、あおい……」

目の前で両親を殺された恐怖からか、まともな声すら出すことができない。そんなアオイを宥めるように、彼は哀れな少女の頭に手を置き、呟く。

「アオイ……か。良い名を授かったな。お前を必死に助けようとした両親への恩を忘れるな。一人でも、強く生きていけ」

「で、でも、あたし……」

両親……その言葉を耳にした瞬間、綺麗な青い瞳から大粒の涙がこぼれた。

「俺は龍。何かあったら俺が助けてやるよ」

龍はアオイの頭をくしゃくしゃと撫でる。それが今は亡き父と重なって、余計に涙が込み上げてきた。

「もうじき夜が明ける。そしたらお前の命まで危うい。だから、今のうちに逃げろ。絶対、死ぬんじゃないぞ」

彼はやわらかく微笑むと「早く行け」と、それだけ言い残し荒れ果てた戦地を後にした。

アオイも彼に言われたとおり、生まれて初めて故郷から足を踏み出す。全身にまだ母の温もりが残っていて、脳裏には残酷な画が焼きついていて……ただ、ただひたすら走ることしか出来なかった。

## ？・拾い物

ようやく朝日が顔を出した頃、まるで人気を感じさせない静まり返った野原を一人の男が歩いてた。年は三十くらいだろうか。土色の髪を無造作に束ねている彼の真紅の瞳は、どこか色褪せて見える。

両手で抱えている幾つかの水桶からすると、彼は川へ向かっているのだろう。

広大な野原には建物はおろか、人すら彼以外には見当たらない。そんなところだ。もちろん水道設備など備わっているはずが無い。無論、水は川に頼るしかないのだ。

彼が足を運ぶ先にはこの大陸を二つに分ける大河が悠々と流れている。

その川の岸边に差し掛かった頃、彼の眼は角ばった岩に引っかかる白い物体を捕らえた。少し距離があるため、それが何なのかは分からなかったが、邪な考えが彼の頭をよぎる。

水ごけがくつついて滑りやすくなっている岩の上を慣れた足取りで進む。

「っ、なんてことだ」

彼はその白い物体の正体を知るなり顔を曇らせた。

そこにあつたのは……いや、正確には“居たのは”だ。

白い衣に身を包んだ少女

何時間も流されたのだろう。彼女の手はひんやりと冷たく、意識は無い。

雪のように白い肌は岩に擦れて小さな切り傷がたくさんできているうえに、泥で汚れてしまっている。

彼はそんな少女を急いで抱きかかえると家路を急いだ。

「死なないてくださいよ」

腕の中でぐったりとする彼女に何度も何度もそう言い聞かせる。

家に着くとすぐに少女の看病に取り掛かる。体中に付着した泥を洗い流し、濡れてしまった衣の代わりに彼女には大きすぎる自分の衣を着せ、そつとベッドに運んだ。

茶色だと思っていた少女の髪は泥がついていた所為でそう見えたらしく、洗い流すと綺麗な琥珀色の髪が姿を現した。

彼はその髪を指で梳くとにやりと妖しい笑みを浮かべた。

「これはいい物を拾ったかもしれせん」

そう呟くと丁寧に彼女の傷口に薬を塗り始める。

彼は薬剤師だった。過去に無い新たな薬の開発を志す、薬剤師。

\*\*\*

「おかあさん、これは何のお肉？」

アオイは目の前に置かれた大きなステーキに目を輝かせた。

「今日は猪肉よ。お隣の小母様から頂いたの」

そう言つて上機嫌な母が夕飯の支度を終えた頃 豪快に扉が開

けられ、ふわつと石けんのいい香りが少し肌寒い風と共に流れ込んできた。

「ほう。今日の夕飯は豪華じゃないか」

銭湯から帰ってきた父が素早くテーブルに駆け寄る。家族みんなでいつもより少し豪華な食卓を囲んだ。

「猪肉なんて何かめでたいことでもあつたのか？」

一番大きな肉を満足そうに頬張りながら父は訊ねる。そんな父に

苦笑しながらも母は「ええ」と頷く。

「なんだ？ ジェシカちゃん嫁入りでもしたのか？」

お酒を片手に冗談を言う父にアオイは思わず吹き出してしまった。父の言っている「ジェシカちゃん」とはアオイにとってお姉ちゃんのような存在だ。小さい頃から隣に住んでいたわけだが、アオイは彼女を女の子らしいなど今まで思ったことが無かった。いつも豪快に笑つて、虫取りが大好きで、必ずどこかに絆創膏を貼っている、

あのジェシカが結婚などアオイには想像も出来なかったのだ。

だから、母が微笑みながら「ええ。しかもお相手は村長の孫の…  
…なんて名前だったかしら？」なんて言ったときは父と二人で物凄  
く驚いてしまった。

「ごちそうさま」

心もお腹も十分に満たされて満足したアオイは居間に横になると、  
夢の世界へと吸い込まれるようにして眠りについた。

それからどれくらい経ったのだろう。

残酷な音があの惨劇の始まりを告げた。

刀の交わる鈍い音、

村のみんなの悲鳴、

幼い赤子の鳴き声……

二度と、聞きたくない音だった。でもそれは、もう耳から離れて  
はくれないようだ。両親の死を告げる音……

（ああ、このままだと父さんが、母さんが、殺されてしまう……）

「お母さん！お父さん！！」

必死にそう叫んだときだった。

一瞬にしてアオイの視界が明るくなる。目に刺さるような光の刺  
激に思わず小さく呻く。

「目が覚めたようですね」

不意にそんな声が聞こえた。とても、優しい声。



？・森の民

次第にぼんやりと歪んでいた視界が鮮明になってくる。

まず視界に入ってきたのは純白。見たことの無い、真っ白な高い天井。そして、左右に目を走らせると同じく純白に統一された壁。大きな窓から射す日差しが眩しい。背中に感じるやわらかい感触で、アオイは自分がベッドか何か横になっていることに気がついた。

「……ここは？」

誰にでもなくそう呟く。

「私の家ですよ。体調の方はどうです？」

さつきと同じ声。咄嗟に声が出たほうに視線を移す。そこでやはりと微笑む男を目にした瞬間、アオイは愕然とした。

無造作に束ねられた髪は土色で、優しくアオイを見据える瞳は真紅。

アオイの住んでいた村では皆が琥珀色の髪と青い瞳を持っていたため、それが常識だと思っていた。

だから、明らかに違う目の前の男を同じ人間だと思ふことはアオイには少し難しかった。思わず体を強張らせる。

「お名前を、教えていただけませんか？」

相変わらず穏やかな口調で話しかけてくる彼だが、アオイは警戒心を捨て切れない。

「アオイ」

俯いたままそう口にする。アオイはふと似たような会話を思い出した。

あのときの、リュウとの会話だ。それと同時に脳裏に焼きついていくたくさんの残酷な画が頭の中に流れ込む。

これは全部、事実なんだ。

そう思うと感傷の情が溢れて堪らない。ひとり悲嘆に暮れていたアオイに彼は「ではアオイさん、少しお話ししましょう」といつの間

に持ってきたのか、温かいミルクを差し出す。  
もくもくと湯気の立つミルクを軽く息で冷ますとゆっくりと口に  
含む。

温かいミルクは冷え切ったアオイの体にはとても有り難いものだ  
った。

「あつたかい……」

自然に笑みがこぼれる。ここに来て初めて笑ったアオイを見て安心  
したのか、よりいっそう笑顔になる彼。

「私はエルガーといいます。傷はまだ痛みますか？」

エルガーの言葉で、アオイは自分の体を見て初めて腕や足……体  
中に包帯が巻かれて、手当てが丁寧に施されているのに気がついた。  
「あの、これは彼方が？」

アオイはなんとなく臆した様子で訊ねる。

「ええ。少しばかり、薬の勉強をしてみました」

自慢するでもなくそう言った彼をアオイはつくづく気遣いの出来  
る人だと思った。またその一方、見知らぬ人にここまでしてもらっ  
ていることに少しばかり心苦しさを感じていた。

「アオイさんはこれからどうするのです？」

彼の問いにアオイは心底困ってしまった。

アオイには帰る家など無い。

自分を迎えてくれる家族も居ない。

知り合いだつてもう一人もいない。

アオイの故郷はもう無くなつてしまったのだから……。

アオイは自分の村から出たことがなかった。だから、あの村はア  
オイの全てと言つても他言では無いだろう。

わたしたちはここから出ることは許されないの。

“神の掟”だから。

これが今は亡き母の、村のみんなの口癖だった。

“神の掟”

アオイにはなぜそんなものがあるのかすら理解できなかったが、

絶対に破ってはいけないものだということだけは十分に理解していた。

『禁忌を破ったものは死をもって償う』

それが村のみんなの自由を縛り付けていた決まり。でも神の掟は絶対に無くてはいけないのだ。

世界が二度と壊れることの無いように。

「アオイさん？」

エルガーの声でアオイは我に返った。

「え？あ、すみません」

アオイは小さく頭を下げると言葉を続ける。

「あの、わたしには帰る家がありません。家族だって知り合いだっ  
てもう居ません。だから、これから……」

アオイが言葉に詰まったときだった。

「ここに居なさい」

エルガーが真剣な顔つきで放った言葉は行く当ての無いアオイに  
は唯一の救いの手だった。

エルガーの親切は素直に嬉しかったのだが、アオイはまだ彼を信用  
できずに居た。明白な理由など無いものの、アオイの中の本能が  
そう言っているような気がしたのだ。

でも今ここで断りでもしたら、アオイは全く知らない場所で、た  
った一人で生きていける自信など無かった。

だから、答える。

「はい」と……

太陽に雲がかかり、窓から射す光がまっすぐな強さを少しばかり  
失ったような気がした。

エルガーはすっかり空になった湯のみを受け取ると、そっと部屋

を後にした。

「森の民がまだ生きていたとは。これほど嬉しい誤算はありません」  
そう言っって怪しい笑みを浮かべていたことなど、アオイは知る由もなかった。

？  
・陰謀（前書き）

今回、ちょっと短めです。

？・陰謀

「アオイさん、街に……行きませんか？」

エルガーがそんなことを言い出したのは一緒に暮らし始めて三日ほど経ったときのことだった。

一度は生死の境をさまよったアオイだったがエルガーの適切な処置のおかげもあってか、だいぶ傷も癒えてすっかり元気になった。

だが、窓の外は生憎の雨。とてもじゃないが“お出かけ日和”とは言えない天候だ。

「今日、ですか？」

昼食で使った食器を洗う手を一度止めて訊ねる。

アオイは自ら、居候させてもらっている身だから。と手伝いをさせてくれるよう頼んだのだ。最初は「仮にも客人だから」と言っていなかったが首を立てに振らないエルガーだったが、必死な姿に折れて今や、食器洗いはアオイの仕事となったのだ。

「ええ。貴女もこれから此処で暮らしていくわけですし、いろいろと必要なものもあるでしょう？」

あのと時のアオイには衣服や食べ物はもちろん、お金すら持つてくる余裕など無かった。無論、なんも持たずに逃げてきたため、どうにかしなくては、とは思っていたがエルガーにそこまでしてもらうのには少しばかり気が引けた。

「ですが、そこまで彼方に迷惑をかけるわけにはいきません」

アオイはそうは言ってみたものの、自分で解決できるような問題ではないのは分かっていてた。

そんな彼女に、エルガーはにっこりと目を細め、口元を緩める。

「私はそこまでお金には困っていません。だから貴女ひとりの生活費くらい大したことありませんよ」

アオイはそう言われて改めて考えてみる。確かに一人暮らしには大きすぎる家や高そうな家具の数々からしても、彼がお金に困って

いるようには見えなかった。

「では、出来る限り彼方の負担にはならないようにします。だから……少しだけ、お言葉に甘えさえていただけられないでしょうか」

アオイはその場で跪くと胸の前で両手を交差させ、頭を下げる。

これが森の民の、アオイたちの住んでいた村での最敬礼であった。そのため、エルガーには奇抜な行動としか思えなかったが、アオイなりに敬意を払っているのだということだけは察することができた。「お顔を上げてください」

アオイはその体勢のままゆっくりと顔を上げる。

彼は微笑んでいた。とても、とても優しい笑みで……。

貴重な森の民ですよ？ 大事にしなくては。

彼の優しさにアオイは涙が溢れた。

どうしてここまで親切にしてくれるんだろう。あたしなんて全くの他人なのに……。

「ありがとうございます、エルガーさん」

アオイは再び頭を下げる。髪の色だって目の色だって、年齢だって違う自分を助けてくれた。優しくしてくれた。そんな嬉しさで胸がいっぱいになる。

じんわりと熱くなつた瞳から零れる大粒の涙が小さな水溜りを創った。

「出かけるのは、夜になってからにしましょうか。とりあえず落ち着くのが先ですね」

彼の言葉で床に出来た水溜りは更に水かさを増すのだった。

「温かいミルクでも用意しますね」

？・街（前書き）

遅くなりました。すみません。



？・街

「温かいミルクでも用意しますね」

彼は初めて会った日と同じ笑みで、同じ優しさで、再びミルクをアオイに差し出した。

\*\*\*

すっかり太陽が沈み、窓の外では細い三日月が淡い光を放っている。そんな草木も眠る刻のこと。

「アオイさん、では行きましょうか」

エルガーが玄関の扉を開けて、先に行くようアオイを促す。

「はい」

アオイはエルガーに借りた、自分より遙かにサイズの大きい革靴でぎこちなく外へ足を踏み出す。彼も後に続いて家を出た。

生憎なことに、しめやかに降り続けている雨が二人を濡らしている。あつという間に高そうな生地のコートが水玉模様でいっぱいになる。

「さあ、早く馬車へ！」

エルガーに言われて庭の木に繋がれてある馬車へ一目散に走って行く。軽く水滴をはらうとそつと馬車の荷台に乗り込んだ。相変わらず立派な馬車にアオイはほとほと感じ入ってしまった。

エルガーもアオイの少し手前に座ると、勢いよく馬に鞭を当てる。乾いた音が暗闇に消えた。

ありがたい事に屋根まで付いているこの馬車のおかげで、しばらくは濡れないで済みそうだ。アオイは安心しながら、馬車の穏やかな揺れに身を任せる。

「こんな遅い時間に連れ出してしまってすみません」

ふと思いついたようにエルガーが呟いた。

「いえ、元はといえばわたしの所為ですし……」

アオイも急に泣き出してしまったことに少しばかりの罪悪感を覚えながらも、苦笑する。

「気にすることはありません。それより、眠くはないですか？　ただ街までは時間が掛かりますし、眠ってもいいですよ？」

アオイは一応、「大丈夫です」とは言ってみたものの、襲い掛かる睡魔には打ち勝てそうになかった。

馬車の揺れが次第に心地よいリズムに変わり、そのままアオイは夢の世界へと旅立った。

それからしばらくの間、エルガーは黙って馬車を走らせた。2頭の馬の蹄が地面を叩く音だけが静かに響き渡る。

「……ん、アオ……さん、アオイさん！」

エルガーはアオイを起こそうと声を掛ける。しかし、気持ち良さそうに眠る彼女を起こしてしまうのに少々ためらいがあるのか、遠慮がちにも聞こえる。数回、名前を呼んだところでアオイが小さく呻いた。重々しくとその瞼が開く。

「んー、うわっ！」

アオイは目を開いた瞬間、視界に入ってきたエルガーの顔に思わずのけぞってしまった。

「驚かせてしまいましたね。ですが、もう着きましたよ」

彼の言葉で辺りを見回すが、「街」と言えるようなものどころか、灯りすら見当たらない。相変わらず暗闇が広がっているだけだ。

「街じゃないんですか？」

アオイは不安になつて、エルガーに尋ねる。

「もう少し先にありますよ。ただ、あそこには馬車を止められるような場所は無いので」

彼は軽く微笑むと「歩けますか？」と困惑した表情を浮かべた。

アオイは小さく頷いて彼に続く。雨はすっかり止んでいたが、水を含んだ地面を慣れない革靴で歩くのは至難の業だった。

そんなアオイを気遣ってか、エルガーは歩くスピードを落とす。

アオイはそれが申し訳なく思えてならなかった。だから、必死に歩

幅を大きくするが上手く歩けずバランスを崩してしまう。

「あっ！」

迂闊にも小さく悲鳴をあげて前のめりになる。しかし、誰かがすばやくアオイの腕を掴んだ。

「エルガーさん……」

「急がなくても、お店は逃げませんから」

そう言っただけで彼は微笑む。だが、アオイはそんな彼の笑顔を見る度に妙な心苦しさに駆られるのだった。

故郷である村ではみんなが家族のような存在だったため、よそよそしく気を使われるのには慣れていないのだ。

まもなくして、前方にわずかな光が見えてきた。

「あれが街、ですか？」

ぼんやりと光っているほうを指差し、訊ねる。

「ええ。ですが、あの表通りへは行きません。その隣の裏通りで今日は我慢していただけませんか？」

あんな煌びやかな場所へ行くのかと淡い期待を抱いていたアオイは、しゅんと肩を落とす。

「わたしはどこでも構いませんから」

そんなふうには言っただけで、何しろアオイはこれほどたくさんの店が並んでいるのを今まで見たことがない。その所為もあってか、やはり“表通り”が気にかかって仕方がない。

だが、せっかくなので連れてきてくれたエルガーに迷惑をかけたまいと、未知の世界に後髪を引かれながらも足を進める。

「やはり、あちらが気になりますか」

いきなり凶星をつかれて、ややたじろいだアオイだったが、慌ててブンブンと首を横に振る。でも、そんな大げさな行動は事実を語っているも同然だった。

「本当に、違いますからね……」

彼女自身もさすがに自分の下手な誤魔化しには気づいていたのか、赤面する。

「子供ならわがままの一つや二つ、言ってもいいのですよ」

彼はそう言っ、何がおかしいのか相好を崩す。てつきり表通りに行けるのだと思ひ込んだアオイも、好奇心に目を輝かせる。だが、そんなアオイの期待もエルガーの一言で再び打ち消された。

「でも、さつきも言ったとおり今日は裏通りだけですから」

その言葉で完全に気落ちしたアオイだったが、またもや彼女の好奇心をくすぐるものがそこにあつた。

「うわぁ……、綺麗！」

大きな瞳を輝かせ、うつとりとそれを見つめる。

裏通り。

まっすぐに続く道の両脇にはたくさんのお店がずらりと並び、それぞれの店にほんのりと明かりを灯した、さまざま色の提灯が飾られている。

暗闇に浮かぶその小さな明かりは、この世のものとは思えないほどに美しく、ひとつひとつが自らの店を誇るかのように堂々と輝いていた。

表通りよりは随分と狭く店数も少ないが、そこはとても幻想的だった。

幾つかの店は既に閉まつているものの、まだ半数以上が営業中で通りにも、いくらか人がいる。

初めて見る、まるで夢のような光景にアオイは思わず見入ってしまった。エルガーもまた、黙つてそんな彼女を温かく見据えているのだった。

？・街（後書き）

ありがとうございました。

？・親子

初めて見る、まるで夢のような光景にアオイは思わず見入ってしまった。エルガーもまた、黙ってそんな彼女を温かく見据えているのだった。

\*\*\*

大きな声で客寄せをする中年の女性。母親と手を繋いで歩く幼い子供。せつせと野菜を運ぶ若者。そして、絶えない笑い声……。

そんな微笑ましい光景が、優しい音が、アオイの脳裏に焼きついた残酷な記憶を少しずつ和らげてくれるのだった。

「エルガーさん、この人たちはどうして目も髪も茶色いんですか？」

アオイとエルガー以外は、お店の人も客も、みんなが茶色の瞳と髪を持ち合わせていた。鶯色だったり白茶だったりと僅かに色は異なっても、基本はやはり茶色で統一されている。

「大半はそうですね。逆にわたし達のような色合いの人間のほうが稀です」

彼の言葉にアオイは曖昧に肯く。

「それは、これとも何か関係が？」

アオイはエルガーに言われて深く被っているコートのフードを指先で軽く掴む。

それは鼻まですっぽり隠れてしまうほどの大きさで、人ごみを歩くには少し不便だった。

「いろいろと面倒ですから」

そんな一言で片付けられてしまったが、何か理由があることだけは分かった。

フードの所為で狭い視界の中、必死に人にぶつからないように歩いていると、急にエルガーが足を止める。

「ここです」

ふとエルガーの指差した店へ視線を移す。綺麗な浅緑の提灯の店だ。

「とりあえず服を買いましょう」

アオイは一人そそくさと店へ入っていくエルガーの後につづく。

「いらつしゃい」

とたんにそんな威勢のいい声が出た。

エルガーをそっと見上げると頭を指差して大きくうなずかれる。

フードをとつてもいいという事なのだろう。

アオイは恐る恐るフードを持ち上げる。視界が広くなって、がちりとした体つきのおじさんと目が合う。

おじさんはぱっちりとした目を更に大きく見開いた。

「こりゃ、驚いた」

ぽかんと開いた口を慌てて閉じると、太い眉を寄せてにやりと怪しい笑みをつくる。

「エルガーさんもみずくせえな。子供がいるなんて聞いてないぜ」  
明らかに的をはずした発言にアオイは驚きながらも少し呆れる。

「こういふことです。面倒でしょう?」

エルガーは囁くような声でアオイに耳打ちする。これにはアオイも苦笑するしかなかった。

「この子に合う服をください」

すると、おじさんは待つてましたと言わんばかりに「はいよ」とエルガーに熱い視線を送る。

そんなおじさんにエルガーは「分かってますよ」と短く笑った。アオイにはおじさんの視線の意味はもちろんのこと、エルガーの言葉すら一体何のことなのか理解できない。小さく首を傾げる。

「今日は、そうですね……。コレくらいでどうですか?」

そう言つてエルガーはおじさんに右手を向ける。どうやら「五」を表したいようだ。

「五つて、五束か!?!」

顎がはずれてしまうのではないかと心配になるくらい大口を開けて驚くおじさんに、エルガーは黙って首を縦に振る。その瞬間、ぱつとおじさんが顔を輝かせた。

「これで、秘密は守っていただけますね？」

念を押すようにそう言いながら、エルガーは背負っていた鞆を下ろし、分厚い札束を五つ取り出す。アオイは見たことのないお金だったが、大金だということは察することが出来た。

「エルガーさん、どうということですか？」

エルガーたちの意味不明なやり取りに少し不安になって、訊ねる。それに、もし自分のためにそんな大金を払ってくれたのなら大変だと思ったのだ。

「私は実はここには来てはいけない人間なのです。だから、そのことを秘密にしてくれるよう頼んでいたのですよ」

エルガーは困ったように口元を緩めると悲しげな目をした。

「じゃ、じゃあ、そのお金は……？」

アオイはいつの間にかおじさんの手元に渡った札束に視線を向ける。

「これは、いわゆる口止め料つてやつです」

エルガーの言葉におじさんが満足そうに頷く。

そのうち大金が入る予定ですから、これくらい何ともありません。アオイさんが稼ぐのですし……ね。

「……ということは、それは私のお金？」

アオイがぼそりと呟く。確かにアオイさえ居なければ、エルガーも街に来ることは無かった。そう考えるとやはり大量な出費の原因はアオイということになる。

思いつめたような顔で考え込むアオイにエルガーは言葉を付け足す。

「アオイさんのせいではありませんよ。私も久々にこの街に来たかったので気にすることはありません」

上手く言い繕ったエルガーだったが、おじさんの一言でそれも台



無しになる。

「そうだせ、アオイちゃん。アオイちゃんの為の買い物だとしてもな、気にする必要なんてさらさらねえよ」

そう言つて自慢げに笑みを浮かべるおじさんにエルガーは冷たい視線を向ける。

「やつぱり、わたしの為のお金……」

再びしゅんとなるアオイに、次こそはとでも言つようにおじさんが口を開く。

「エルガーさんはな、ちよいと金をもちすぎてんだ。だからどんどん使つちまえ」

目頭を押さえて「はあ」と大きく溜息をつくエルガーとは裏腹にアオイは完全に開き直っていた。

「それもそうですよ。では、お言葉に甘えさせていただきます、エルガーさん」

子供らしい笑顔を向けるアオイ。安心したような、驚いたような表情のエルガー。そして、お腹を抱えて破顔一笑するおじさん。

「アオイちゃん、最高だぜ！ 気に入った！」

「また来てくれよ、アオイちゃん！」

おじさんは真新しい数着の服と共にアオイたちを相変わらずにこやかに送り出してくれた。

再度フードを被り、嬉しそうな足取りで道を歩くアオイ。彼女の服が入った紙袋を手を提げ、その横で足を進めるエルガー。

「アオイさんのことですから、一人で思いつめてしまうのではないかと心配だったので……少し安心しました」

「だって、エルガーさんが言っただんですよ？ 子供ならわがままの一つや二つ、いいって」

フードのせいで表情は見えないものの、二人の間に漂うその空気はまるで親子のように温かいものだった。



？・親子（後書き）

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0550q/>

---

蒼き龍の運命

2011年3月31日19時10分発行